

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0991000118		
法人名	医療法人社団 湘風会		
事業所名	グループホーム ピオニー		
所在地	栃木県大田原市山の手2-13-31		
自己評価作成日	平成24年10月29日	評価結果市町村受理日	平成27年2月27日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.jp/09/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人アスク
所在地	栃木県那須塩原市松浦町118-189
訪問調査日	平成26年10月28日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

「ゆっくり、いっしょに、楽しみながら」を事業所理念とし、入居者一人ひとりのペースやその人らしさを大切にしながら楽しみを持って共同生活を送れるような支援を心掛けています。
季節の行事を通して時候の移り変わりを感じていただけるような外出支援や、事業所の秋祭り『湘風祭』、地区の文化祭等への作品出展等を通して、地域との関係作りにも力を入れています。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

市街地の中心に位置しているが、すぐ裏側は閑静な住宅街となっており、都市の利便性と快適な住環境を兼ね備えた場所に設置されている。建物は料亭を改修した二階建てで、2階がグループホームとなっており、1階には小規模多機能型居宅介護事業所が併設されている。玄関には一般住宅にあるような駄箱と花を生けた花瓶が置いてあり、家庭的な雰囲気を醸し出している。2階に上がると、入居者の明るい会話や笑い声が聞こえ、事業所理念を基に一人ひとりのペースやその人らしさを大切にしながら楽しみをもって共同生活を送れるよう支援しているのがわかる。通院時にはできるだけケアマネージャーが付き添うなどの受診支援もしている。地域の文化祭への入居者作品の出品、防災訓練時には近隣住民が避難した入居者の見守りをしてくれるなど地域との交流も行われている。開設当初からの職員が半数以上おり、入居者中心の考え方がしっかり根付いて入居者との関係づくりもできており、事業所理念の理解度も高く、理念が反映されたサービスが実践されている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓該当するものに○印		項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 家族の2/3くらいと
			3. 利用者の1/3くらいが				3. 家族の1/3くらいと
			4. ほとんど掴んでいない				4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように
			2. 数日に1回程度ある				2. 数日に1回程度
			3. たまにある				3. たまに
			4. ほとんどない				4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 少しずつ増えている
			3. 利用者の1/3くらいが				3. あまり増えていない
			4. ほとんどいない				4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が	66	職員は、活き活きと働いている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 職員の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが				3. 職員の1/3くらいが
			4. ほとんどいない				4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが				3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない				4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 家族等の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが				3. 家族等の1/3くらいが
			4. ほとんどいない				4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が				
			2. 利用者の2/3くらいが				
			3. 利用者の1/3くらいが				
			4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価		
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
Ⅰ.理念に基づく運営						
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	「ゆっくり」「いっしょに」「楽しみながら」を事業所理念とし、職員がそれを共有できるよう玄関前に掲示している。また、年に一度行う接遇マナーの勉強会にて、事業所理念を確認し、サービスの実践につなげている。	ピオニーは法人が最初に設置したグループホームということもあり、事業所理念は設立当初に施設長、管理者等で作成したものである。その後法人全体のグループホームの理念としたため、法人理念と事業所理念が同じものになっている。職員の半数以上が開設当初からの職員であり、事業所理念である「ゆっくり」「いっしょに」「楽しみながら」の理解度も高く、理念を常に確認しながらサービスの実践に努めている。		
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	自治会に加入し、回覧板を通して情報を得ている。地域の文化祭に参加したり、事業所の秋祭り「湘風祭」への参加を地域住民に呼びかけ参加していただいている。また、年に2回行う消防訓練の際、近隣住民の協力を得ている。	地域の文化祭が中学校と合同で中学校の校舎で開催されており、入居者の作品の貼り絵や割り箸工芸などを出品している。事業所の秋祭りには、地域の方が見学に訪れたり、地元の大学生も手伝いに来てくれており、避難訓練には近隣住民が避難した入居者の見守りを行ってくれるなど、地域との交流が行われている。歌謡曲、オカリナ、ハーモニカ、人形劇などボランティアで来訪する方も多い。	地域の文化祭への作品出品、防災訓練の際の近隣住民の協力など、地域との付き合いが行われているが、自治消防団との協力関係の構築など、さらに地域との繋がりが発展することを期待する。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	以前、地域住民を対象とした「認知症サポーター講座」を開催した。今年度中にも再び開催したいと考えている。また、年に一度、施設をオープンにした秋祭りを開催し、地域の方々に施設の内部や利用者の作品、認知症の方への支援をみていただき、理解を得ている。			
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議では①入居者数・介護度・年齢・地域②利用状況③活動実績・行事報告行っている。会議のメンバーから提言をいただき、地域の文化祭へ作品を出展したり、利用者の外出や楽しみについての意見をいただいて、サービスの向上に活かしている。また、地域住民代表の方から、消防訓練に協力していきたいとの申し出があった。	運営推進会議は、入居者家族代表、地域代表の元自治公民館長や民生委員、行政関係者の市職員や地域包括支援センター職員で構成され、年6回開催されている。会議では、地域の絵画展など開催情報が伝えられ作品を出品するきっかけになったり、ボランティアや入居者の外出先などの情報が提供されたりするなど、サービスの向上に活かされている。自治消防団との訓練の提案もあったがまだ実現していない。		
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	市の介護保険事業計画や実地指導、運営推進会議等を通して、運営の指導を得ている。また、事業所連絡会やケアマネ連絡会でも、市との連携を図っている。	市の担当者とは、運営推進会議で市からの情報提供や助言を受けたり、会議の議事録を手渡す際に情報の交換をするなど、協力関係を築いている。また、市が事務局となっている事業所連絡会やケアマネ連絡協議会等にも参加し、意見交換や情報の取得に努めている。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	事業所のマニュアルを通して身体拘束による弊害を理解するとともに、個人尊重のケア・見守り・声掛け・寄り添いの実施により、身体拘束のない支援に努めている。	職員に対しては、身体拘束に関する外部研修、事業所内研修を受講させ、スピーチロックに関しても年1回の接遇研修により声かけなどにも気をつけるようにさせており、所内の定例会では具体的な事例による話し合いも行っている。事業所が2階にあるため、出入口が入ロドアとエレベータの2カ所あるが、入居者の動きに気を配ることによって無施錠で対応するなど、身体拘束のない介護に努めている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	利用者及び家族との関わりを通して、虐待のサインを見逃さないよう配慮している。事業所内においても、情報の共有や交換により虐待防止に努めている。また、年間研修計画の中にも取り入れており、虐待について学ぶ機会を作る予定である。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	以前、有識者を招き、権利擁護に関する事業所内研修を行った。必要性が出た際には、学んだことを活用できるよう支援したい。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又はや改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約書を基にグループホームの役割や制度に関することを十分に説明し、入居者が新たな生活を確立するための、本人や家族の理解・納得を得たうえで契約を締結している。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	介護計画見直しに当たっては「サービス担当者会議」を開催し入居者の家族に出席していただき意見や要望の把握を行っている。また、利用料金納入時や病院受診時に来所された際も話し合いの場として活用している。また、苦情処理担当を設けて、いつでも対応できるよう努めている。	通院介助や利用料金の支払い、サービス担当者会議等で家族が来所したときに家族と話し合う機会を設けている。利用料金の支払いを事務所で手渡しで行うようにして来所する機会を増やしたり、管理者を苦情受付担当にして常に対応できるようにしたり、入口に意見箱を置くなど、家族の意見を採り上げやすい環境を整えている。意見要望はあまりでないが、家族は入居者の日頃の様子を知る機会が多く安心している。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	月に一回の管理者ケアマネ会議、職員定例会議を通して、意見や提案を聞く機会を設けている。	日常の会話、月1回開催される定例会、年1回程度の施設長との面談等を通じて職員の意見提案を聞いている。定例会に参加できない職員には議事録を配布している。職員提案による改善事例としては、ベッドからの転落防止に入居者の動きを音で知らせる工夫や手作り食事の日を増やしたことなどがある。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	各職員がやりがいを感じ、向上心を持って働けるよう、個々の能力や実績、勤務状況を考慮したうえで、環境や条件整備に努めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	毎月の事業所内研修の実施や、外部の研修を回覧して周知を図り参加する機会を作っている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	市のサービス事業所連絡会やケアマネ連絡会をとおして、同業者との交流・情報交換を行っている。また、県内事業所の職員を対象に、事業所間交流会を定期的に行っている。		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	利用前に、本人や家族に会って聞き取りを行い、本人の状態や要望等をうかがって、状況にあった支援ができるよう努めている。職員は本人の思いを傾聴することを心掛け、良い関係作りに努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居前や契約時に家族との面会を行い、不安や要望を聞く機会を作り、関係作りに努めている。また、入居後も家族の来訪時に現況をお知らせし、家族の意向や思いに耳を傾け、安心していただけるよう心掛けている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	インテーク時に本人・家族の思いや意向の聞き役となり、共に解決策を見い出せるよう話しやすい雰囲気作りを心掛けている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	これまでの生活の中で得意とされていた物（料理・編み物・縫物等）を教えていただくなど、人生の先輩として尊重し、話に耳を傾け、共に支え合う関係を築いていけるよう努めている。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族の来訪時に現況を報告したり、毎月の請求書と一緒に写真入りの手紙を送ることで本人の様子をお知らせしている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	併設のみずばしように知り合いが通われていて事業所間を行き来したり、みずばしよから入居された方もいるため、入居を機に近くに住む親せきや知り合いが訪ねてくることがある。また、かかりつけ医受診の継続など身近な環境で馴染みの人や場所との関係継続に努めている。	地域の文化祭や買い物等の外出で知り合いと出会ったりしている。併設の小規模多機能事業所に知り合いが通いで来ていたり、この施設から移ってくる方もいて、併設事業所との行き来がある。入居を機に近くに住む親戚や知り合いが訪ねてきたり、孫が訪問してきて歓談している姿も見られる。外出の機会を増やすなど馴染みの人や場所との関係継続の支援に努めている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	洗濯物の片付けや食事前後の作業が共同のものとなるよう支援したり、気の合う方同士が近くに座れるよう配慮している。同じ状況・環境の中で関わり合いの大切さを感じていただき、職員が適度に介入することで、孤立せずに交流が深まるような支援に努めている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	入院後や退居後も、近くに行った際には訪問し様子を見に行くこともある。退居後も必要に応じて相談や支援に努めており、再入居に至ったケースもある。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日頃の生活から、本人の表情や仕草などを観察し、興味の対象、好き嫌いや思いなどを探り、心地よさが何かを見い出すように心掛けている。	日頃の入居者との関わりを通して、本人の表情、仕草、会話などから、また入所が長い入居者についてはこれまでの状況や行動様式、生活歴などを参考にして、興味や好き嫌いなどの本人の意向を推測している。趣味や関心の対象を見つけレクレーションに活かしたり、洗濯物をたたむ等の何気ない日常の仕事をすることで入居者に心地よさを味わってもらっている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居時には必ず、生活歴、得意だったことやこだわり、さらには住まいの間取りなどを把握して、入居後の生活に安心感をもてるよう心掛けている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	職員一人ひとりが、心身の状態や有する能力等の観察に努め、細かな変化の状況も共有するよう申し送りを充実している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人がその人らしく穏やかに暮らす為の課題とケアのあり方について、本人・家族・職員と話し合うためのサービス担当者会議や定例会議でケアカンファレンスを行っている。そして、それぞれの思いや意見が反映されるよう介護計画を作成している。	ケアマネージャーは、日誌、個別経過記録、申し送りノート、職員からの聞き取り等で入居者の日常の様子を確認し、家族、職員、ケアマネージャー等で行うサービス担当者会議で意見や要望を聞きとり、職員の定例会での職員の意見をもとに介護計画を作成している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個別経過記録や日報、申し送りノート等によって情報が共有され、日々のケアの修正や介護計画の見直しへの蓄積となっている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	家族の協力を得て、デパートや美容院に出掛けたり、外食や住み慣れた自宅への立ち寄り(草むしり)などで気分転換を図っている。また、地域の祭りや展覧会、食材買出しに出掛けたり、一階のみずばしようにお茶を飲み立ち寄り交流を図っている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	一人ひとりの暮らしを支える地域資源の把握・開拓までは至っていないが、地域のボランティア、出張理容などとの交流や、お祭り、文化祭などに参加することで、楽しみのある生活が送れるよう努めている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入居前からの主治医に継続して診ていただいている。診察時の付き添いは基本的には家族が行っているが、看護師の資格を持つ計画作成担当者もできるだけ同行し状態を報告するなど主治医との連携を深めている。受診に同行できない場合は電話や事前に主治医と面談したりし、確実に主治医に入居者の状態が伝わるようにしている。	かかりつけ医は入居前の主治医に継続してもらい、受診は家族の付添で行っている。看護師資格を持つケアマネージャーもできるだけ同行するようにしており、入居者の情報を正確により細かく主治医に伝えることができ、処方薬の見直しなど、入居者の負担軽減につながっている。家族のみの受診の時は、事前に事業所側から医師に状況を知らせており、家族には情報を書面にして渡ししている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	事業者内に専従の看護師はいないが、看護師の資格を持つ介護支援専門員のアドバイスのにより、適切な支援ができるよう努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院に際しては、かかりつけ医と連携し紹介状などの入手、家族への状況説明等を行い、不安の除去に努めている。入院してからも状態把握や病院関係者との情報交換や相談のため面会し関係作りを行っている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域との関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居時に重症化や終末期の医療ニーズの高くなった場合の事業所として対応、どのような状態になるまで入居していただけるか、また、支援方法などについて説明し話し合っている。日頃から入居者の状態については家族にお知らせし、情報を共有して状態の悪化、医療依存度が高くなってきた場合も家族と話し合いを重ね、不安の除去に努めている。	入所時に重度化に関しての話し合いは行われているが、医療行為依存度が高くなった時点で、家族、主治医、事業所担当者で十分な話し合いを行い、その後の過ごし方を決めていくことにしている。現在まで事業所での看取りはないが、今後、事業所での看取りを希望する入居者が出てくることが考えられる。医療との連携や家族の協力、さらに職員の研修がこれからの課題と考えている。	今後、入居者家族から重度化や終末期への取り組みの要望が出てくることが考えられる。医療との連携、家族の協力など課題も多いが、事業所としての取り組み方針の策定、職員のスキルアップのための勉強会や研修等に取り組むことが望まれる。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	緊急時対応マニュアルを常に確認できる場所に掲示している。また、定期的な救急救命講習の受講や救急隊に渡す利用者情報を準備している。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年に2回、地域住民も交えた防災訓練を実施し、消防署職員から指導・助言をいただいている。6月には、地震から火災発生という想定で訓練を行った。	防災マニュアルが作成されており、地域住民、消防署職員が参加して防災訓練が実施されている。事業所が2階ということもあって、避難の際にはシーツを使って階段を避難させる方法を消防署職員から提案されている。今年の大雪による停電を経験し、石油ストーブを購入するなど備品の見直しも行っている。スプリンクラーは設置済みである。	運営推進会議で地域の方から自治消防団との消防訓練について提案があった。2階からの避難という課題もあることから、災害時には地域の協力が大変重要と思われるので自治消防団との協力関係を築いてほしい。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	個人情報の守秘義務を契約書に明記し、契約時に説明している。また、接遇マニュアルの作成や法人のプライバシー保護規定を玄関に掲示し、利用者・家族の人権やプライバシーにも配慮しながら支援に努めている。	開設当初からの職員や入居者が多く、互いを尊重し、思いやる双方の信頼関係ができている。トイレ誘導の言葉かけもさりげなくされ、誇りやプライバシーへの配慮がなされている。入居者の個人情報は部外者の目につかないように管理され保管されている。ホームページ、広報紙など個人が特定されるものは本人の承諾を得てから掲載している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	本人の希望や思いに配慮し、出来る限り要望に沿うことや、自己表現しやすい関係を築けるよう、日々の関わりを大切にしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	できる限りその人らしい生活が送れるよう、一人ひとりのペースを大切に、少しでも多くの楽しみが得られるよう支援に努めている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	季節や気候に合わせて本人に衣類を選んでいただけるよう声掛けをしたり、爪の手入れの支援等を行い、その人らしい身だしなみやお洒落ができるよう努めている。髪の毛の長さを見ながら、ヘアカットを勧めたりもしている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	毎日ホワイトボードにその日の食事メニューを記載し、献立や材料の説明をしている。できる方には食後の片付けやテーブル拭き、食器拭きを行っていただいたり、一緒に食材やおやつのお買い物に出掛けて、好みのものを選んでいただいている。	メニューは食事を担当する職員が考え、調理も職員が行っている。調理済み食材を近くの総菜屋さんから購入することもある。食事の準備や片付けは、できる入居者がそれぞれの決まった役割を自主的に行っている。誕生日には本人希望のメニューが用意され、おやつも多くは手作りで、移動式パン屋が週一回来所し、自分でパンを選ぶ楽しみもある。職員と入居者が同じテーブルで一緒に食事をしているが、入居者の笑顔と楽しい会話が食事への満足度を表している。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	既往歴を考慮しながら、個々の摂取量に配慮した盛り付けを行っている。食事量と水分量は毎日チェック表に記載している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	一人ひとりの残存能力に合わせて、食後のハブラシあるいは義歯洗浄の支援を行い、清潔保持に努めている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	極力オムツを使用しないことを基本とし、生活パターンと残存機能に応じたトイレ誘導や排泄用品の使用に努めている。	日中はさりげない声かけ誘導で全員トイレを使用する排泄支援をしている。夜間はベッド脇の鈴を鳴らして合図し、トイレでの排泄支援をしてもらう入居者もいる。入院により衰えた排泄能力を、退院後に、洗面時の立ち上がりや車いすからの乗降回数を増やす工夫により、入院以前の状態に戻した例もある。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	チェック表で排泄状況を把握し、乳製品や食物繊維の多い物を摂っていただいたり、体操や歩行運動を行って体を動かすことで便秘の予防・対応に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	1対1の個浴でゆっくりと入浴していただいている。季節によってはゆず湯や菖蒲湯、入浴剤を使うなどして入浴を楽しんでいた工夫をしている。	週2～3回、午前中に入浴をしているが、今後は入浴の時間帯を広げることも検討している。入浴を嫌がる入居者には時間帯や介助者の変更等に対応している。浴槽内には入居者の状態に合わせて移動できる手すりが取り付けられている。重度の入居者は併設の小規模多機能事業所の機械浴を利用するようにしている。	現在は午前中に入浴となっているが、入居者の希望する時間帯での入浴を実現することを期待する。
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	生活リズムに合わせて臨機応変に対応している。日中の短時間での朝寝や昼寝、室温調整や湯たんぽの使用、照明加減の配慮などで睡眠環境が快適になるよう努めている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	服薬一覧表を活用したり、臨時薬等の変更を申し送りノートと日報で職員が把握し、一人ひとりの状態に合った服薬支援を行っている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	リビングや廊下のモップ掛け、洗濯物たたみ・干し、食事の後片付け、食器拭き等のそれぞれの生活歴や力を活かした手伝いをさせていただいたり、脳トレ、体操や歌唱、生け花や手芸等を一人ひとりの出来る範囲で楽しんでいる。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	食材やおやつやゴミ出しに職員と共に出掛けたり、洗濯物干しやゴミ出し等、気分転換に行っている。また、ドライブや外食等の行事計画を立てて季節を感じていただけるよう配慮している。家族との外出も含め、外出記録をチェックして入居者がまんべんなく出掛けられるようにしている。	街中にあるという立地を活かし、週に2回は車で近くのスーパーにおやつや食材の買い物に行き、町内を一周する散歩コースは好評でよく出かけている。徒歩の外出が困難な入居者には、1階外まで降りて行くゴミ出しや洗濯物干し等の機会を作っている。季節を感じるための外食ドライブ等は全員で出かけている。事業所の前に来る移動パン屋での買い物は入居者にとって小さな楽しみとなっている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	所持することを制限はしていないが、現在所持を希望する方がいない。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	特に行っていないが、入居者から家族に伝えたい事などがある際は、スタッフが間に入り連絡を取ることもある。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	快適に生活できるよう、共有部分を清潔にし、室温を調整したり、空気の入替えをしている。季節にあった歌の歌詞、切り絵やカレンダー、生け花や誕生日のポスター等を壁に貼り、季節感を感じられるようにしている。	玄関には家庭用下駄箱を設置し、入居者の生けた花が飾られており、食堂の椅子もあえて同じものに揃えず家庭的な雰囲気を醸し出している。広い窓から見える花や色づき始めた八朔柑が季節を感じさせ、窓から入る日の光が心地よい空間を作っている。室内は掃除が行き届き、清潔に保たれている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	出来る限り一人ひとりの居場所や話せる場所づくりができるよう、テーブルやソファの配置に配慮している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	家族から在宅時のベッドの位置を確認してから配置するなど、少しでも自室の間取りに近づけ環境を変えないよう配慮している。また、馴染みの物品や日用品、趣味用品を持参していただいている。写真やぬいぐるみを飾ることで安心されている方もいる。	改修型施設のため部屋の間取りが異なっているが、それぞれが自宅から家具や思い出の品物を道込み、落ち着いて過ごせる居室をつくっている。室内全体が整頓されているため広く感じられる。ベッドの位置に配慮したり、窓にカーテンと共に障子を入れて家庭的な雰囲気を出すなどの工夫がみられる。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	建物内を整理整頓し、床に物を置かないようにしたり、廊下や窓に手すりを設置するなどして事故防止に努めている。トイレや居室にわかりやすいよう表示を出し、出来る限り自立した生活が送れるよう支援に努めている。		